二学期の子どもの遊びから

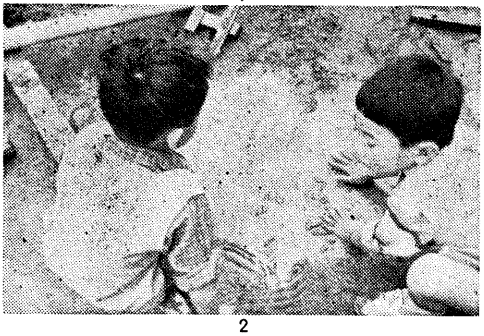
福西百合

九月に登園してきた子どもたちは、夏休み中に蓄積したエネルギーを一度に発散しようとしているのではないかと思われるほど活発であった。一学期に比較し、遊びは変化に富み、持続時間も長く、人数も多くなってきた。それらの中からいくつかをひろってみよう。

〝セメント〟作り（写真１２３）

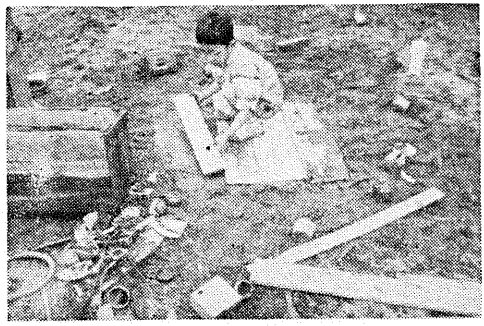
砂場のあちこちに板を運んでは並べていた。何かきいてみると「セメント作りだよ！」とのこと。水を流して砂をドロドロにし、棒でそこを平にする。あちこちから板をさがしてきてそっとその上にのせる。しばらくそのままにしておき、板をとると、その部分がコンクリートを流したようにきれい

1



2

3

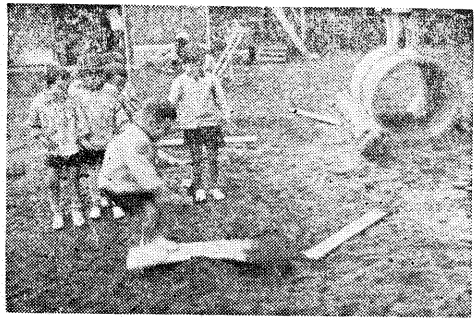


になっている。水を入れてやわらかくした部分の水がひいてしまうことと、水がひいてしまったようでも、手でたたくとまたビシャビシャになることを不思議がっていた。

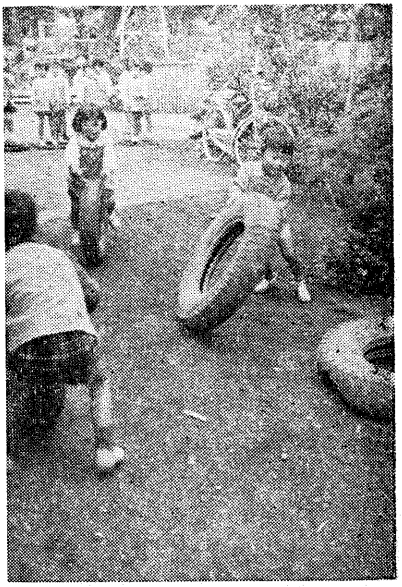
「とびのると砂がとぶよ！」（写真4）

砂で山を作って、そこに板をのせ一方にとびのっては板がずれることを楽しんでいたが、偶然とびのる反対側の板に乗っていた砂がとぶことに気づいた。そこで板の上に、小さく砂の山を作っては、板にとびのることをくり返した。何度もしていて、どの辺を支点にしたら、またどんなとびのり方をしたら、砂が遠くまでとぶかを見出していた。一度とぶと支点の部分の砂山が少しくずれる。はじめはそのたびになおしていたが、丸太をさがしてきて下に置いた。しかし持ってきた丸太の高さが左右異なるため、板はやや傾き、砂は思わぬ方にとび、そのたびに、子どもたちはキャーキャーいいながら、あちこち逃げまわった。あまりひどく砂がとびちるため、かわりに空罐をおくことにした。数度くり返してみて、どのようにすればどちらにとぶかがわかってきて、意図的にあちこちととばしていた。とばすものも空罐・砂場のおちゃわん、ボールなど変えてみて、とび方のちがいに気づいたようだ。

4



5



タイヤリレー（写真5）

タイヤの大きさと子どもの脚の長さによってころがし方がちがってくる。はじめは小さいタイヤを両脚にはさむようにしてゆっくりまわしていたが、次第に、力強く押せば脚でおさえなくとも進むことに気づき、ずっとスピードがでてきた。大きいタイヤの場合は、倒さないようにして進ますことに注意をはらってころがしていた。

タイヤたて（写真6）

重いタイヤころがしをしているうちに「指一本でも立つよ！」と大発見をしたかのごとくさわぎだした。重いのを倒れないようにこ

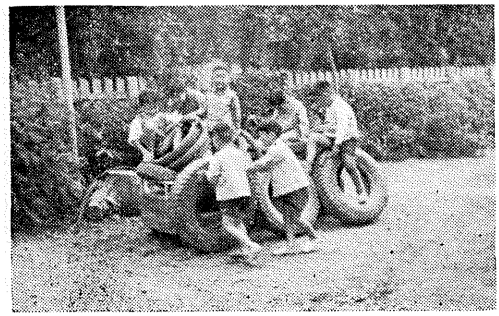
6

ろがすのに苦心していた子たちにとって、指一本でおさえて立ててておけるということは、大きな驚きであった。そんな時「手をはなしても立ってるよ！」と新たな驚きの声が発せられた。そしてタイヤを集めてきては次々に立てて喜んだ。

「消防車だ！」（写真7）

タイヤを小さい車にのせて、消防ごっこになった。あちこちから妙な姿勢でのりこんではさわいでいた。タイヤの重なりがホースを連想させたらしい。

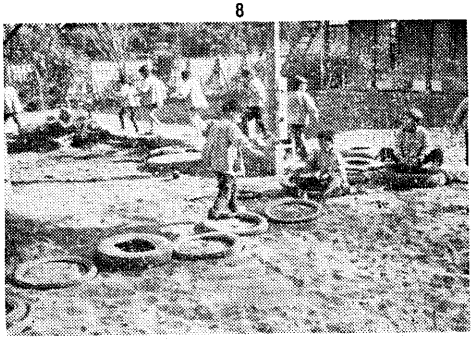
7



タイヤわたり（写真8）

園庭にタイヤを並べてその上を上靴のままで渡り歩く。砂の部分は海だといっておちないように細いタイヤの上を歩くことにスリルを感じたらしい。

8

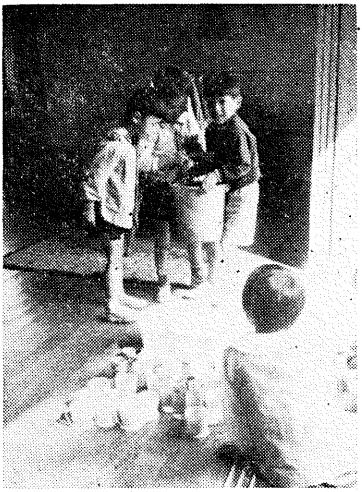


「おばけだー」（写真9 10）

遠足ごっこだと部屋のあちこちにすわってお弁当を食べた日、陽のあたる部分にいた子のコップの牛乳で光が反射し天井にうつった。それを見て「あっ、おばけ！きえろ！」とさわぎはじめた。天井の光のコップの主は、先に気づいても、自分のコップの牛乳がおばけを作っているとは知らず、関係なしにお弁当を食べていた。しかしその子の手の動きにより天井の光は写ったり消えたりする。「ボクがこうやると動くぞ！」と部屋の奥の方の子がさわぎだす。光をみあげて、手をふったり、カバンをまわしてみたり「きえろ！」「うつれ！」などとどなったりしながらも正体をつかもうと努めた。かなり長い時間かかって、それがコップの牛乳に反射された光であるとわかった。そうわかる

9

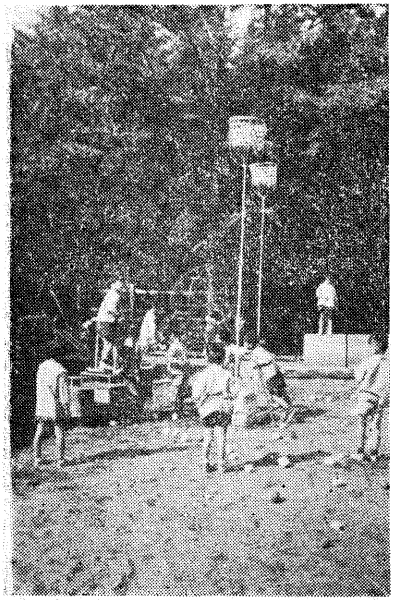
10



と、もっと写してみたいと部屋中のコップ、ビンなどの器に水を満たして並べた。しかしわざとコップの前に立ち影を作ってみて、変化を楽しんだり、どうして光があんな所に写るのか不思議がったりした。その後、さまざまの物を使って反射させてみては「実験するんだ」とはりきっていた。

11

12



「キャーにげろ！」（写真11）

子どもの家から大きなビニール袋をいただいた。大きさをみるために一人の子にそれをかぶせたら、周囲の子が大さわぎで逃げまわりはじめた。部屋中キャーキャー、ギャーギャーのすごいにぎやかなおにごっことなった。

「高い所にのればいいんだ」（写真12）

小学校の運動会を見て、玉入

れやつなひきをしたがる子がでてきたので、園庭に玉入れのかごを立てた。はじめは二米位の高さにしておいたが、何度もくり返すので、倍近い高さにひきあげてみた。はじめは今迄と同じようになげていたが、思うように入らないので、あちこちからふみ台として使えるものをさがしてきて、かごのすぐ下に置き、それにのって玉を入れようとした。しかしかごの近く、それもなるべく高い所からすれば入ると思った子たちも、そこから投げてみても仲々入らないので、またもやあちこちと場所をかえてみて、かごのすぐ下からよりも、少し離れている方がよいということに気づいた。

「**これで入れると細い水なんだ**」(写真13)

13

一学期には水と樋を用いても水が流れるだけの高さの差があればそれでよかったが、この頃になると、ずっと高い所から水を流すようになった。どんな容器で水を流すかにより、流れ出る水の早さが変るのだという。「これ(広口の罐)だとずっとむこうの方までいくんだけれどね。これ(細口)だと、細い水なんだ」と流れ方の違いを表現していた。

14

「**ダッセン・テンブク!**」(写真14)

物の動きを楽しむ子たちは、次々に動かないものを動かそうと努力する。箱積木でスロープを作り、そこで木型自動車を走らせる。かなり早くなるため途中で転覆してしまい、下まで走っていくのは少ない。床までつくとかなり遠くまで走る。その方向も時によってちがうので、何度も何度も走らせていた。男児がこんな喜びを見出した時女児には一緒にしてみようとする子は少なく、そのまわりに集まってただ見ている子が多い・見るたのしみもあろうが、やはり

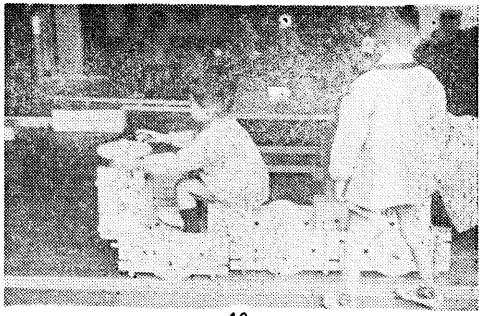
自分でそれをしてみることが重要だと思うが、こんな点女児は消極的である。

組板の自動車（写真15 16 17）

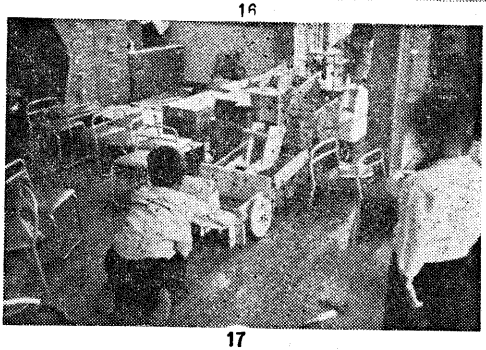
はじめは円形のものをころがして走らせたり、おみこしを作ったりだった組板を自動車にして運転したり押しあるくことが多くなった。長く連結させる工夫をして、三人位乗れるようにしたため、おもしろさがましたらしい。帰りには、箱積木を利用した斜面を押し上げて、少し高い車庫に入れ、車輌点検をしてから帰る。

板で座席を作る（写真18 19）

15

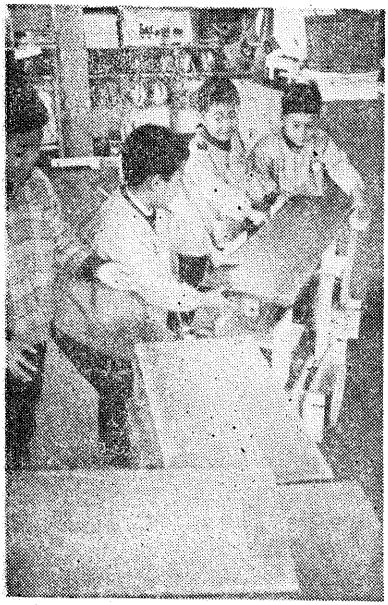


16



17

18

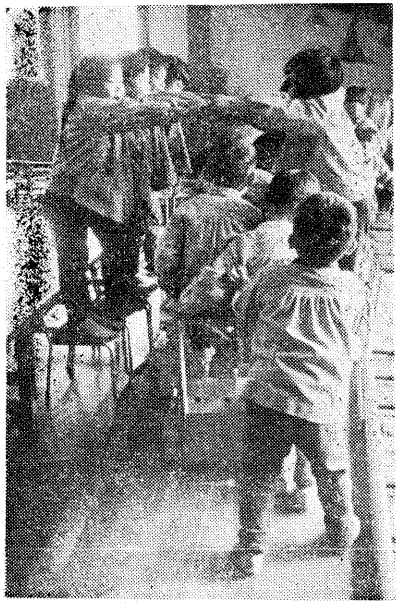


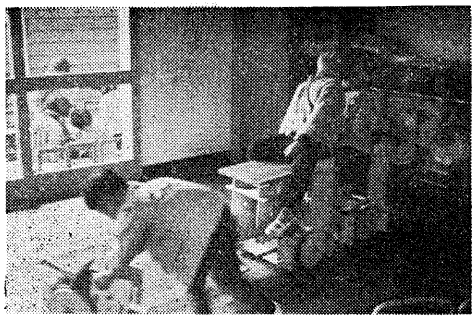
組板の自動車もあれやこれやと形を組みかえて、かなり大きなものを作るようになったある日、板を持ってきてのせる子がいた。そうしてみると今までと感じの違う車になった。板の部分にこしかけて両足で車をまわすと自分で運転ができるのである。板の上に寝て、友だちに押してもらうのもおもしろいらしい。

「火事だ！」（写真20）

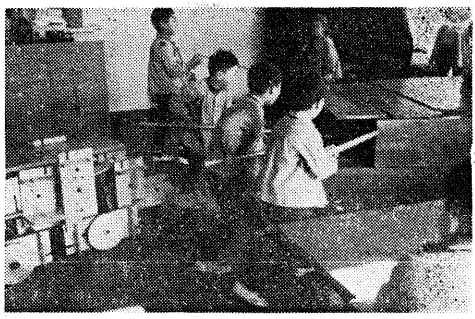
近くで火事があり子どもたちは

21





19



20

いろいろのことを身近に見、経験した。早速男児は消防車を作り消防隊員になってパイプを持ち出して積木の家の火事を消す。女児はおままごとコーナーから食器やふとん、人形などを運び出し逃げる。どちらも真剣であり機敏に行動していた。今まではあこがれを持って考えていた消防隊の人々の働きを見て、火事のおそろしさを強く感じたらしい。

「トンネルです」（写真21）

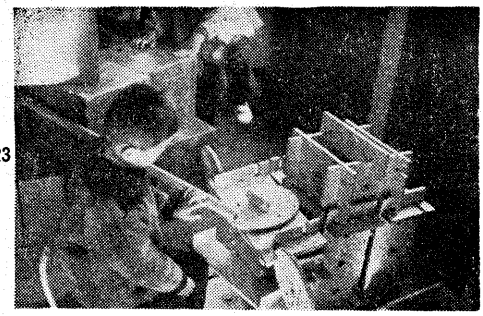
どういうわけか女児はあまり活発に動きまわらない。男児が組板の汽車ごっこをしているのを見て、トンネルを作り、知っている汽車の歌を次々にうたい、男児の汽車を通してやっていた。男児が活動的に遊び、女児はその遊びにおもしろ味を加える下働きというように、男女間で仕事の分担ができてしまったのかと感じることが時どきある。

「何のレコードかけますか」（写真22 23 24）

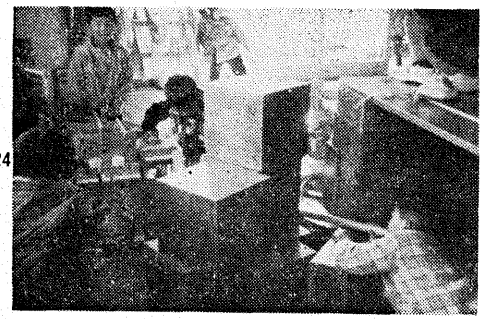
組板でレコードプレーヤーを作った。円形のものをレコードにして両面の曲をそれぞれ決めておき、木槌を中心にさしてまわす。次に「声のでるレコードです」といって作ったのは、パイプをレコードの一部にのせたものである。パイプの端は箱積木の家の中にあり、パイプに口をあてて交代に歌をうたうのである。パイプの中を通ってレコードの方に声がでてくるため、とてもおもしろがった。「音楽しようよ！」といって、バドミントンのエレキギター、フー

22

23



24



ブのドラム、タイコなどの演奏もはじめた。小学校の鼓笛隊をみてから子どもたちが作った指揮棒も持ちだされて大にぎわいになった。はじめは、ブレーヤーだけだったものが、ジュースの自動販売機についてジュークボックスになってしまった。

「おしくらまんじゅう！」（写真25）

寒くなってきて、陽だまりに集まるようになったある日、だれからともなく敷居にこしかけてのおしくらまんじゅうをはじめた。約二十名の子におされるとよほど頑張らないとおしだされてしまう。汗を流しての大奮闘だった。

「ウワー・カッパだ」

二人の女児が大声で笑うのでよくみると、「いっこの手でくちびるをひっぱって、もういっこの手、頭にのせてみな！」といって

25

は、相手のまぶたをひっぱって、「ウワー、カッパみたい、カッパだ！」と笑うのである。どこでおぼえてきたのか妙な遊びだった。

クリスマスツリー作り（写真26 27）

もみの木でなく、大きな紙にクリスマスツリーを描くことにした。朝準備しておくと、きた子から何やかやと描きはじめた。色紙で星を作ったり、ローソクを作ったりしてはる子、輪つなぎをしてさげる子もいた。クレパスでいろいろと描いたあと、絵の具で塗り壁にはる。

また、お友だちへのクリスマスカードを描いたので、窓にはって装飾の一部にした。

二学期のおわりの日に（写真28）

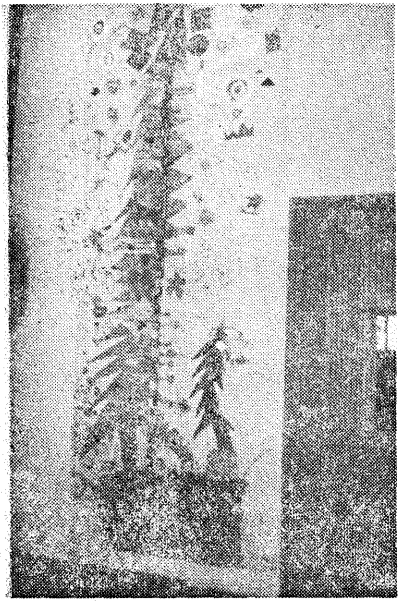
クリスマスの前にクリスマスに関するお話を六回にわけてした。子どもたちはそれぞれを絵に描き、子どもたちのイメージのクリスマス物語の紙芝居を作り、母親を招いて見せた。

それぞれの絵についている子どものお話により、大人の話がどのように子どもに受けとめられるかを知らされて、興味深かった。

同時に、言語・動作・絵などに表現される子どもの姿を、もっと知りたいと強く感じさせられた。そして子どもの内にひそむものを、十分に発揮できる場を作ってあげたいとつくづく感じた。

（茨城県下妻小友幼稚園）

27



26

28